

森里川海交流による環境保全と地域づくり ー農山漁村の新たな再発見からの地域再生ー

山形県内陸北部の山間地に位置する角川の里。5月も終わりになってようやく川の雪代がおさまってきた。周囲の山々がほぼ雪解けを終えたということなのだろう。溪流釣りが大好きな筆者にとってははいよいよシーズン到来、これから毎日早起きをして、イワナやヤマメをねらう日々が続くことになる。

筆者のように（いや、それ以上の）川好き・釣り好きの面々が農山村にはたくさんいる。溪流釣りにおける筆者の直接の師匠の一人は前のPTA会長だし、そのまた師匠は地元の投網の名人で、今も現役で年に何本もサクラマスをあげている。いずれも小さな同じ集落にお住まいなので、角川地区全体ではどれほどの川好き・釣り好きがいるか知れない。

そんな溪流を愛する面々の今の悩ましい問題はなんといっても河川の環境や生態系の問題である。自分たちの漁場である一河流域だけの話では済まされない複雑な問題をはらんでおり、自分たちの努力だけでは何ともしがたいものだからだ。

溪流魚というと、海とは直接的には関係がないように思われる読者もいるかもしれない。また、森や農業と具体的にどんな関係があるかもあまり知らない方が多いのではなかろうか。川と森里海とは実に深いつながりがある。角川の里のように海から50km以上も内陸に入った孤立した溪流上流部の村においてもそうである。例えば、川に生息するヤマメはその一部が海に下り、海の養分をたくさん蓄えて、60cm以上にもなる魚体となって春先溪流を上ってくる。これがサクラマスだ。また、よく知られているようにサケは秋に川を遡上してくる。これらの魚は地元の川漁文化を育むと同時に、死んで森の栄養分として還元されることとなる。このように海と森を川がつなぎ、その川を上下する魚が海と森を強固に結び付けているわけである。また森の状態は、イワナやヤマメの餌となるカワムシの生息環境を作用しており、溪流沿いの集落には棚田における農薬の使用状況は、川の水質や生態系に大きな影響を与える。また、河川の工事、例えば護岸工事やダムや砂防堰堤の建設は直接的に魚の遡上に影響する。溪流釣りが好きな面々にとっては、常に地域や業種を超えた観点から環境や生態系保全の大切さを実感するものなのである。

このような意味で昨年、多主体・広域連携の環境保全と里づくりを目指すNPO団体が結成されたのは意義深い。それまでの角川の地域団体から独立し、より広域で環境保全や里づくりの活動に取り組もうと立ち上がったのである。「NPO法人里の自然文化共育研究所」である。取り組みのはじめとして角川の里がある山形県内陸地域の最上地方から西部海岸地域の庄内地方にかけて各地域集落を結びながら交流学習や集落調査活動を進めている。実際各地を回って気がつくことは、環境もそうだが、経済的にも社会的にもいかに各地の農山漁村が厳しい状況におかれているかということである。だが同時に見えてくるのはこのような交流活動が、環境保全というテーマを越え地域活性化のために様々な場面で役立ちそうだという可能性である。例えば庄内浜沖に位置する飛島と角川の里ではトビウオダ

シと炭の交換経済が成立しそうな様子だ。また近年、仙台市からこの地方に 2 泊 3 日程度の体験旅行が増加しつつあるのだが、森里川海の交流ワークショップの成果はこれら外部者のための体験プログラムの開発と提供に結びつきそうな気配である。実際角川の里では今年 2,000 人以上の交流人口が見込まれている。

地域を越えた連携協働の里づくり活動は環境保全だけではない地域の活性化に結びつきそうだ。確かに課題は地域に山積みしているように見える。だが、その解決策も実は地域の内部に存在している。それは地元の方々には気がつきにくい農山漁村の何気ない日々の暮らしの営みの中にあるのだろう。森里川海、そして都市との連携協働の活動はこうした潜在能力を掘り起こしてくれる効用があるようだ。